

# テアトロ

5  
2019

第20回テアトロ演劇賞、  
第31回テアトロ新人戯曲賞(佳作)  
パーティーグラフィア掲載

◆戯曲◆

## 伊江島

—辺野古をおもう—

相澤嘉久治

【対談シライケイタ大いに語る②】

シライケイタ／西堂行人  
纂【**斉藤 淳**と**今井朋彦**】

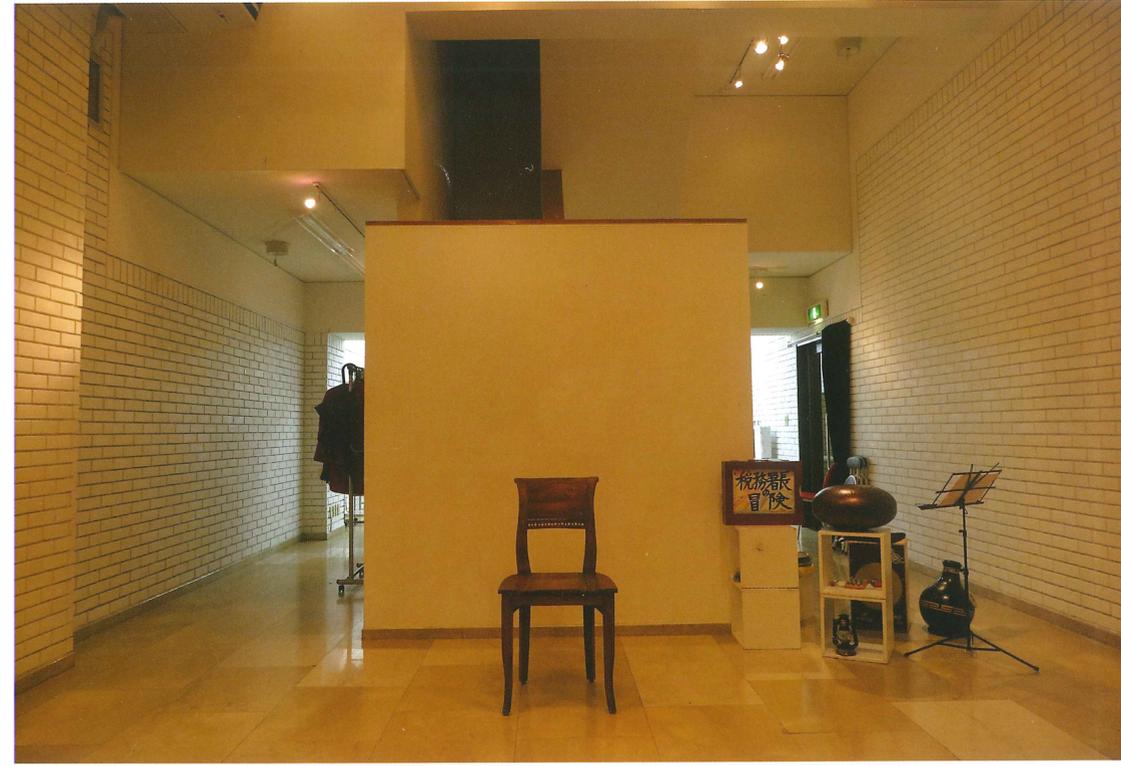
谷岡健彦／みなもとごろう／中本信幸

エッセイ | 高橋宏幸／池田政之

●連載⑧ 台湾／流山児 祥

●レポート 劇作家大会／丸尾 聡

今月選んだベストスリー 298 渡辺 保



## 3月の関西

### 未来に伝えるメッセージ

#### 清流劇場「壁の向こうのダントン」

清流劇場がビューヒナーの『ダントンの死』を原作とする『壁の向こうのダントン』を上演(3月6日、大阪市の一心寺シアター倶楽で所見、田中孝弥作・演出)。

フランス革命期の政治家ダントン(田村K-1)は、寛容で穏健派。多くの命が失われることを憂い、革命を終結すべきと考える。それに対し、急進派のロベスピエール(高口真吾)は「理想のためには恐怖政治も必要」と考え、対立。かつては同じ目的のために闘った同志であるはずのダントンを、ロベスピエールが追い詰め、ギロチン台へ送るまでが描かれる。

舞台は一部が八百屋で、両側に赤い椅子が大量に積み上げられ、壁を作る。俳優達が椅子の形を変え、街の風景や牢獄へと象徴的に造形していく。

ビューヒナーの原作と、ロマン・ロランの『ダントン』を引用、田中のオリジナルの台詞を加えて構成。原作には政治家達の演説の長台詞が多いが、本作ではその部分は簡潔にし、庶民の描写を重視、加筆した。生活苦から庶民達が立ち上がり、1789年に革命が起きるが、やがて暴徒と化し、1792年に民衆が牢獄を襲撃する。反革

命派でない人も含めて殺害された九月虐殺事件だ。シモン(上海太郎)という一人の庶民を軸に据え、彼が過激化する過程を追った。ダントンは九月虐殺に衝撃を受け、革命の終結を唱えるが、それによって処刑される。死の直前、ダントンはシモンに壁の欠片を渡す。「世の中はきつとよくなるというお守りだ」と。庶民に失望しつつ、それでも庶民に希望を託すダントン。シモンはその思いを受け取る。

シモン役の上海太郎は、娘が男達に身を売ったことをきっかけに富裕層に殺意を抱き、変貌する心理を描写。ロベスピエール役の高口真吾は、当初は人間味のある人物像を造形。しかし周囲からの圧力もあり、ダントンの死刑を決意。冷徹な人物に変化する様を、鬼気迫る演技で描写した。

ベルリンの壁崩壊から30年。その後もイスラエルでは分離壁が建設され、アメリカでもメキシコ国境に新たな壁が建設されつつある。人間は壁を作り、壊し、また作る。その繰り返しの歴史。

九鬼葉子

心の壁を作るロベスピエール。一旦は壁を作るが、命を何より重視するダントンとの出会いにより、心の壁が溶けていくシモン。状況によって人がいかに変化するのか。その怖さを高口が、希望を上海が表現した。